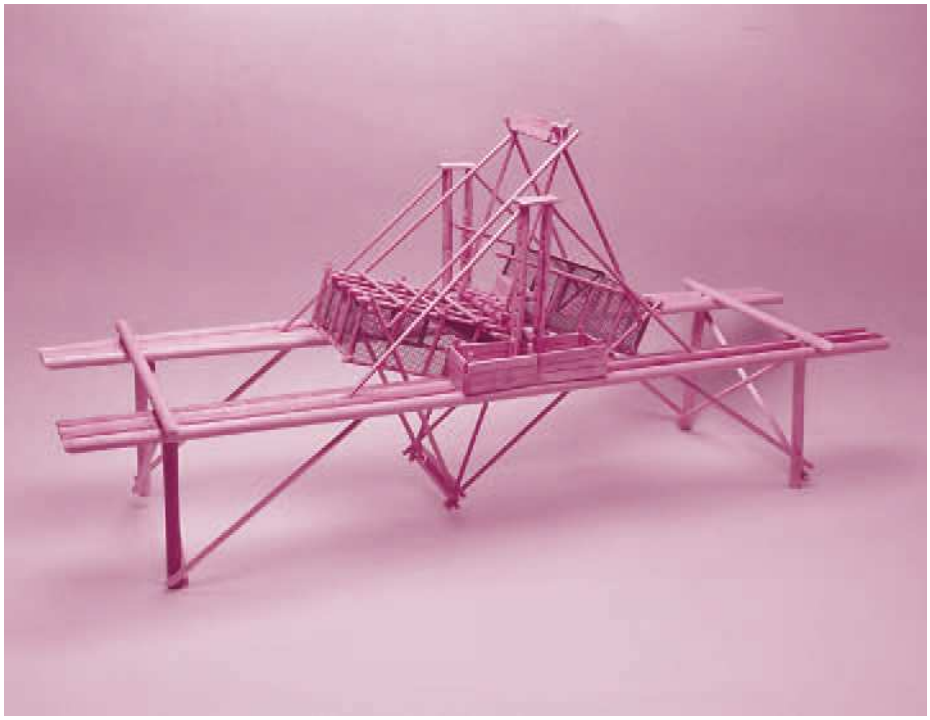
ISSN 0917－4729

# 北方民族博物館だより

No. 105



H28.29　フィッシュホイール（捕魚車）模型　アサバスカ・インディアン（推定）
米国／アラスカ　2016年収集　54.0x18.0cm　Ron Riddle製作

フィッシュホイールはアラスカで現在も用いられている漁具です。水流を動力としてカゴを回転させることで、遡上（そじょう）するサケ類を捕えます。捕えられた魚は食用としてだけではなく、イヌの餌（えさ）としても利用されます。日本ではインディアン水車とも呼ばれますが、もともとは金採掘者が20世紀初頭にアラスカに持ち込んだものとされています。

目次　Contents

1　表紙　フィッシュホイール（捕魚車）模型
2　講座　「ユーコンの先住民カスカの狩猟文化と世界観」
　／ロビー展「寄贈資料展」
3　館長講座「北方民族から学ぶ」
　／新館長就任ご挨拶「モノをいかす博物館めざして」
4　INFORMATION

北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

## 講座

# ユーコンの先住民カスカの狩猟文化と世界観

2017. 3. 19

**講師　山口　未花子氏（岐阜大学助教）**

山口　未花子氏

平成28年度企画展『ボレアル・フォレストの狩猟民ーアサバスカ・インディアンの暮らし』の関連事業として、岐阜大学の山口未花子氏にカスカの狩猟文化について解説いただききました。

北方アサバスカ語族の諸言語を話す人びと（北方アサバスカン）の中には、例えばチペワイアンやグィッチンのようにカリブーなど特定の種に強く依存してきた集団もいる一方で、カスカは様々な動物の狩猟を生活の礎としてきました。

カスカの居住地域は周期的に大群をなしてやってくる動物種の分布域からはずれており、そのことが多様な野生哺乳動物を頻繁に利用するというカスカの生業の特徴に関係しています。講座で言及された動物だけでも、ヘラジカ、ビーバー、クズリ、テン、オオカミ、オオヤマネコ、カンジキウサギ、マスクラット、ヤマアラシ、リス、クロクマ、ライチョウなど、多様な動物の狩猟やエピソードが紹介されました。

こうした動物たちはライフル猟だけではなく、落としワナやくくりワナなど動物ごとに適した多様な方法で狩猟されており、肉や毛皮が利用されています。

狩猟はカスカと動物のいちばんの接点であるといえます。カスカは他の北方アサバスカンと同様に、動物が考えや言葉を持つ存在であり、人間のパートナーであるというアニミズム的な世界観や、動物と人間が異なる存在でありながら、本質的には同じであるという初源的同一性と呼ばれる考えを共有しています。

一部の動物は強い力を持っているため畏（おそ）れの対象として扱われ、動物と良好な関係を維持することに注意が払われています。例えば白いリスはリスのチーフであるとされ、天候を操ることができるとされています。またビーバーとヤマアラシは仲が悪いとされ、ビーバーとヤマアラシのことを同時に話すこともタブーとなっています。ヘラジカを解体する際は、調理などをヘラジカに見せないという配慮から目玉がくり抜かれます。

こうしたカスカの世界観は「（カスカは）大地の一部であり、水の一部であり、動物の一部である」という有名な古老の言葉に象徴されており、狩猟を重ねることでそのような感覚を実感できるといいます。

（学芸グループ　野口　泰弥）

## ロビー展

# 寄贈資料展

2017. 4. 15-5. 25

開館以来当館には数多くの資料が寄贈されています。この寄贈資料から当館の活動の一端をたどることを展示のテーマとし、導入部、コレクションの寄贈資料、シンポジウム参加者の寄贈資料、木彫り熊、研究者からの寄贈資料のコーナーで構成しました。

導入部では当館寄贈第１号資料や、ドルガンの女性用衣服を展示しました。第１号資料は、ウイルタの木偶３点です。実際に信仰の対象となっていたもので、展示したのは吊り下げて占いに用いることもできたものです。ドルガンの衣装は当館に同民族の資料が展示されていないことを残念に思ったドルガン出身者が、後日日本人研究者を通じて寄贈されたものです。

ある程度まとまった、コレクションと呼べる規模の寄贈も何件か受けています。この３月で閉鎖になったアラスカ州政府日本支局所蔵だったエスキモーの仮面や、言語学者の一括寄贈資料などをそれぞれ一部展示しました。

当館で長年続けているシンポジウムの発表者から寄贈された資料でもコーナーを作りました。発表に使用されたウデヘのワナの水彩画や、招聘のお礼にと寄贈された、1950-70年代のアムール流域やサハリンの民族文化を紹介する貴重な写真などです。

このほか平成12年に開催した「木彫り『熊』源流展」開催に際して行った、新聞紙上での呼びかけに応えて寄贈された木彫り熊や、当館の研究協力者が現地調査時に収集した資料を紹介しました。

寄贈者に展示の案内をしたところ、わざわざ遠方から観覧に来られたり、お手紙を下さった方もいらっしゃいました。当館に資料をご寄贈くださったみなさまと、寄贈の経緯のなかでご尽力くださった方々に感謝を申しあげます。

（学芸グループ　笹倉　いる美）

会場の様子

## 館長講座

# 北方民族から学ぶ

2017. 3. 25

**講師　岡田　淳子（北海道立北方民族博物館 前館長）**

何時の頃からか「今が人生で一番幸せ」と感じて来ました。仕事や立場が変わっても、当博物館でも、その思いは続いていました。

いよいよ最後の講座をする時が来て、私は博物館に展示できない想いを語ろうと考えました。この度は長年接してきたユピック・エスキモーについてです。

1972年にその人たちと初めて接したとき、本などで理解していたものと随分違うと気づきました。まず、女性は英語を知らないからコミュニケーションをとるのが難しいと聞いていましたが、むしろ女性のほうが上手に英語を話します。誤解は、それまで外から訪れた人たちがみな男性で、女性は外の男性には話しかけないからでした。

女の子たちがやってきて「これから草摘みに行く、どんな草を採るかは習った、毒だから花は取らない（植物の保護?）」と走り去って行きました。次に、二人の女性が近寄ってきて「あなたのハズバンドをずっと前から知っている」と10年前に夫が調査で訪れた時の印象を語ってくれました。かなりの褒め言葉だったので、「もし私がここで彼と出会ったら一緒に暮らさなかったでしょう、まだ雁（かり）を一羽も捕ってくれないから」と言うと、楽しそうにクククと笑って納得しました。口から冷気を入れない特有の笑い方です。

これらから、彼らは現在に生きていて、過去のことは記憶せず未来を思い煩うこともないという見解と、彼らは植物性のものを摂らないけれど、生肉を食べてビタミンを補給すると言う二つの考えも改めました。野イチゴ摘みだけでなく夏季は植物をせっせと採集して、葉物は一部乾燥させて冬の食料や薬草として使う実態を知ったからです。ここでは生肉、生魚は男性だけが食べ、女性は口にしません。

何よりも人の和を大切にして相手の気持ちを察し、運命を嘆かず現実を直視するという生き方には学ぶべきものがありました。また自分の命は自分で守るという信条は、我々の災害時にも共通するもので、厳しい自然の中で生き延びる鉄則を実感させられます。常に先を見て準備する緻密さも、極北の人たちから学びました。

以上は永い間に培われた文化ですが、軍隊に入るなど外に出ると変化してしまうこともあり、争いのない平和な社会が変節するのは、悔しく悲しいことだと痛感します。

当博物館が何時までも輝き続けますように。

（前館長　岡田　淳子）

岡田 淳子前館長

## 新館長就任 ご挨拶

# モノをいかす博物館めざして

当館がオープンしたのは、今を去ること四半世紀以上前の1991年２月のことでした。私個人としては、1988年から科学研究費を得て３か年に渡って実施されたツングース言語文化実地調査が終わる時期とちょうど重なっていました。長い冬の時代からようやく開放に転じ始めた中国東北部とロシア極東の先住民のもとをいち早く訪ねることができたのは、人文系の研究としてはおそらく初のケースだったと思います。グループを率いたのは故・黒田信一郎先生で、仲間には佐々木史郎さんや風間伸次郎さんといった、のちの北方研究をリードする若手が参加していました。実は、この調査グループの目的の一つに、当館のために北方民族の実物資料を収集すること（少なくともその道筋をつけること）も含まれていたのです。

博物館のなかには、モノが先にあって、その行き場所として博物館が作られるケースも少なくありません。たとえば私が以前館長を務めた北海道大学総合博物館のような大学博物館は、ほとんどモノ先行型と言っていいでしょう。それに対して、当館はまさにモノを集めるところから始まり、以来一貫して資料収集に力を入れてきたと言えます。

われわれのグループが当館開設にどれだけの貢献ができたかはともかく、開館と同時に私自身資料収集評価委員に任命され、以来今春まで務めてきました。長年にわたり、さまざまな北方民族の暮らしにかかわる実物や映像資料を実見する機会に恵まれたことは大変得難い経験でした。開館当初は手持ち資料を並べてしのいだ感さえあった展示でしたが、今や北方民族に関する世界でも有数のコレクションを誇るまでに成長しています。

展示資料の背後にどれだけの蓄積があるかが博物館の底力だ、と初代館長の大林太良先生がおっしゃっていたのを思い出します。もちろん、モノを持っていること自体が大事なのではなく、常にそれを多くの人に見て、知って、活用してもらう工夫が必要です。そのために何ができるか、来館者の皆さんの声を聞きながら、スタッフとともに努力していきたいと思っています。

どうぞよろしくお願いします。

（館長　津曲　敏郎）

1989年12月ハバロフスク郷土博物館前で　左から風間伸次郎氏、黒田信一郎氏、ポンサ・キレ氏（ナーナイ資料提供者）、右端は筆者

## 第32回特別展「ユーラシア北方のウマ牧畜民―カザフ　モンゴル　サハ」

ウマ牧畜を伝統的な生業としてきたカザフ、モンゴル、サハを対象に、騎乗や馬乳酒の利用など、ユーラシア北方地域におけるウマと人との深い関係を紹介します。

**主催**：北海道立北方民族博物館

**協力**：国立民族学博物館、NPO法人北方アジア文化交流センターしゃがぁ、廣田千恵子氏、池田カナ子氏

**開催期間**：平成29年７月15日(土)～10月15日(日)

**会場**：北海道立北方民族博物館・特別展示室

**観覧料**：一般450円、65歳以上300円、高校・大学生200円（常設展示とのセット割引もあります）

**主な展示資料**：鞍、あぶみなどの馬具類、馬乳酒容器、衣類・生活用具など

騎乗用鞍(サハ)

馬頭琴(頭部)
(モンゴル)

### 特別展関連事業

**解説会**「特別展展示解説会」　７月23日(日)　①10:00-10:30　②11:00-11:30
　　８月20日(日)　①10:00-10:30　②11:00-11:30
　担当：中田　篤（当館主任学芸員）

**特別展関連講演会**「カザフ草原の暮らしとウマ」９月17日(日) 10:00-11:30
　講師：藤本　透子氏（国立民族学博物館准教授）

**講座**「モンゴル国のカザフー遊牧文化と暮らしのなかの刺繍」9月30日(土) 13:30-15:00
　講師：廣田 千恵子氏（千葉大学大学院博士後期課程）

**講習会**「カザフかぎ針刺繍入門」10月1日(日) 9:30-12:00
　講師：廣田 千恵子氏（千葉大学大学院博士後期課程）

# INFORMATION

## 行事報告

◆４月22日(土)、はくぶつかんクラブ「ロシアのチーズおやき」（講師：山田祥子学芸員）を開催しました。

◆５月３日(水・祝)～５日(金・祝)こどもの日関連イベントとして「革でつくるキラキラブレスレット」「北方モチーフ簡単マグネットづくり」「こいのぼりリフレクターづくり」を開催しました。

完成したブレスレットを持つ参加者

◆５月６日(土)、上映会「北方民族映画館」（担当：野口泰弥学芸員）を開催しました。

◆５月７日(日)、解説会「常設展展示解説会」（講師：笹倉いる美学芸主幹、山田祥子学芸員、野口泰弥学芸員）を開催しました。

◆５月13日(土)はくぶつかんクラブ「土器づくり」（講師：菅原章子解説員）を開催しました。

◆５月20日(土)観察会「博物館周辺の北の植物たち」（講師：工藤森生氏）を開催しました。

参加者に山菜を解説する工藤氏

◆５月21日(日)講習会「お細工物づくり　うさぎのシーソー遊び」（講師：浜田智津子氏）を開催しました。

完成した作品を手にする参加者

◆５月28日(日)、施設見学会「道立オホーツク公園・北方民族博物館」（担当：中田篤主任学芸員）を開催しました。

## 職員の異動

[退任]（平成29年３月31日）
　岡田　淳子（館長）
[就任]（平成29年４月１日）
　津曲　敏郎（館長）
[退職]（平成29年３月31日）
　下間　孝志（博物館課主査）
　濱名　亜璃紗（解説員）
[採用]（平成29年４月１日）
　笹尾　誠（博物館課主査）
　平栗　美紅（解説員）

北方民族博物館だより
No. 105

平成29(2017)年６月21日発行
編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
Tel 0152-45-3888　Fax 0152-45-3889
e-mail：tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
　一般財団法人北方文化振興協会